

参考図書紹介

最新のアジアミツバチ研究の集大成

Oldroyd, B. P. and S. Wongsiri. 2006. Asian Honey Bees. Biology, Conservation, and Human Interaction. Harvard Univ. Press, Cambridge. 340 pp. ISBN 067402194-0

オオミツバチの巣を表紙にあしらったこの書籍の著者は、それぞれオーストラリアとタイを代表するミツバチ研究者である。その点で、彼らがこれまでの研究成果をとりまとめたものと評価するのは短絡に過ぎる。実際には、標題からは想定されていないような、セイヨウミツバチの研究者や養蜂家に、これまでにはなかった多くの情報を届けている。それはこの書籍が英語で書かれており、Harvard 大学出版局から刊行されていることで、明らかに欧米人の読者をねらっている点にも現れているが、それも本来の狙いからすれば当然のことであろう。

これまで生物学の分野で多くの研究者によってなされた研究によってミツバチという生き物を多くの人が知ることになったのは、主にセイヨウミツバチを材料とした研究を通じてである。長い研究史の中で多くの人にとってミツバチに関する知識はセイヨウミツバチのそれと同義であった。こうした状況に対して、著者たちは、「ミツバチの常識」となっていたセイヨウミツバチから得られた研究成果を、生物学的にも、ヒトとの関係においても、あるべき正しい位置付けに配置し直す作業を、この書籍で試みているといえる。

全世界に9種いるミツバチの中で、養蜂種としてはコスモポリタンな生き物であるセイヨウミツバチも、元来ヨーロッパ・アフリカを原産とするただ一種のミツバチで、残る8種はすべてアジア原産である。そのセイヨウミツバチが他のミツバチを代表する場面ももちろんあるが、逆に、他とはかけ離れて特殊で、いつも正統とは限らない場面も多々ある。そのことは、残る8種のミツバチを物語るこの書籍におい

て、明らかにされている。

アジアのミツバチを対象に進められた研究の集大成という観点でも、もちろんこの書籍は意欲的な仕上がりになっている。全12章に分けられた本文に、

新しい研究成果を盛り込んでいるが、セイヨウミツバチの生物学を扱う専門書には見られない項目が次々と並んでいる点は目を引く。

ただし、項目には偏りがあり、またその中で扱われるミツバチ種も限定されている。例えば、地域での有用性やヒトとのつながりに触れながら、生産物であるハチミツや蜂ろうなどに関しては記述が少ない点は惜しい。これは、同時に、その分野に関してまだ研究が充分ではないことでもあり、研究者の目には、研究テーマが行間にも、暗黙のうちに示されているとも映る。

序文を寄せたコーネル大学の Seeley 教授も指摘しているように、過去15年間に、驚くべきミツバチの実態、例えば、トウヨウミツバチによるスズメバチの熱殺、100 km を超えるオオミツバチの渡りなどが明らかになってきた。いずれも、セイヨウミツバチからは想像を絶する世界で、かえってセイヨウミツバチを知っているだけに驚かされるミツバチの能力である。

アジアの読者はそのことを再認識することで、セイヨウミツバチ一辺倒の養蜂、セイヨウミツバチで得られた科学的知識への固執から解放され、各地原産のミツバチへの視点を新たに築くことができるだろうか。波及する効果に期待したい。
(中村 純)

